

102×3 ～肝臓にも優しくなっています～

高菜わさび

「そろそろ決着をつけるか」

「そうだな」

枝豆と冷や奴は、どちらが夏のビールに相応しいか、因縁の決着をつけることにした。

...で、どっちが勝ったかというと。

「飲んだ後は、やっぱりこれだな」

夏のビールのお供決定戦は、二日酔い開けの、朝食の味噌汁（しじみ）になりました。

「やはり肝臓

に優しいのが、こう高ポイントだな」

「俺も昔は若かったからな」

高校野球をみんなで見ていた昼休み、豆腐さんがぼつりと、そんなことを言い出した。

「豆腐さんもそんな時があったんですね」

「あったさ！」

「このまま豆腐になるだなんて、ゴメンだね！」

豆腐になるために、豆乳はにがりを入れられる温度に管理される、その待ち時間を隙を見て逃げ出す。

誰かのKAWASAKI（バイク）を無理やり乗って、そのまま海まで行った。

「それでどうなったんです？」

「綺麗な空と、汚い浜見たら、俺って子供だなんて思って帰ってきた」

「それでなんで海に行きたかったんです？」

「水着の姉ちゃん見たかった」

焼きそば食べながら、豆腐さんは教えてくれる。

「豆腐になるのも悪くないぜ！」

青ノリがついた笑顔を見せた。

二代目の副業

「やっぱり少しでも軽くしたいというのは、どこの会社でもあるんじゃないんでしょうか」とある社長のインタビュー。

「豆腐って、水の中に入れた状態でパックして、運ばないと、壊れちゃいますからね」

この社長は元々デザイナーをしていて、先代である父親が倒れたのを気に、社長を継いだ二代目なのである。

「ただ豆腐を作るだけじゃなくて、変えるところは、変えていかないと、今の世の中、従業員の給料も出なくなります」

そして彼は豆腐のパックする水の量を半分にすることに成功した。

「まだこの地域だけですけどね」

秘密は自社トラックに積んである、この板なのだが。

「この板は、トラック輸送の際の揺れをほとんど吸収してしまうんです、デザインと素材で、予算はクリアしました」

そのためにガソリンの使用量が二割減ったらしい。

「まだまだクリアする点はありますが」

そして彼が凄い所は、その豆腐を守るための仕組みを活かして。

腰痛に悩む人向けのマットレスを作ってしまったことだろう。何しろ、豆腐の崩れを防止するほど、制震に優れた物なので。

「今じゃ、こっちの方が本業だって言われてますよ」

男の子？女の子？

「問題」

「何だよ、いきなり」

「さて、この手に持っている豆腐は、男の子でしょうか、女の子でしょうか？」

「んなのわからない！」

「っていうか、そんなの、考えたことないよ」

「...時間切れ、じゃあ解答、この豆腐をじっと見つめてみて」

「見つめて？」

といいながら見つめると。

何見てやがるんだ？

という顔をした。

「はい、正解は男の子でした！」

「どういう事だよ！」

「豆腐はね、男の子だと、今みたいに、何を見ているって顔するんだ」

「じゃあ、女の子なら？」

視線を背け、頬を赤らめます。

「そうですね、家族が仲いいことが一番だと思うんですよね」

じゃあ、その仲のいい秘密ってあるんですか？

「そうだな、夕食が終わったらなんですけどね」

「お父さんは豆腐を散歩するような話がいいと思うけどな」

「ええ、お父さん、豆腐は散歩もいいけどさ、格好いいポーズつけた方が、こんな！」

息子は自分で考えたポーズを披露する。

「もう、雅史ったら」

「お母さんはどう思うの」

「そうね、お母さんはね」

家族が仲がいい秘密は、みんなで豆腐の話をする事です。

私は玩具屋さんで働いています、働くきっかけというか、変な話なんですけど、玩具に全く興味がないから、雇われたんです。

なんでも玩具とかは、趣味が入ってしまうと、仕入れを失敗しちゃったりするからなんですって。

最近またわからない物が入荷しました。

立体パズル「木綿豆腐」です。 白いピースを組み立てて、木綿豆腐を完成させるそうなのですが、私にはこれが何で作られたのかがわかりませんし。

「ありがとうございました」

そしてこれが、なんで大人気なのかもわかりません。

「お前なんて、呪われてしまえ！」

豆腐にそう叫ばれた。

「あのさ」

「なんだよ」

「醤油をかけ過ぎた程度で、いちいち何で呪われなきゃならないんだよ」

「醤油のかけすぎは、豆腐に対する冒涇だ！」

豆腐を怒らせると怖いんだぞ！

「何が怖いんだ」

侮ったその時。

グパァ！

豆腐はそんな音と共に、二つに割れて、大きな口を開けた。その大きな口は、侮った男よりも遥かに大きく、鯨のようだ。

...その後、男の姿を見たものはいない。

コスプレ

豆腐に人気なコスプレ、ベスト3。

- ・ 冷や奴 （ネギ付き）
- ・ 湯豆腐 （ネギ付き）
- ・ 麻婆豆腐（ネギ付き）

「なあ」

「なんだ？」

「いくら眼鏡と豆腐が好きだからって、豆腐に眼鏡かけることないんじゃないか？」

「でも、可愛いだろう？」

命名 ステファニー

「今日は自信があります」

プレゼンテーション。

「どういうものか、見せてもらおうか」

「はい、まずこれなんですけど、豆腐の容器についている、そのつまみを引っ張ってください」

「これか？」

「つまみを引っ張ると、豆腐が容器から落ちてきます」

バチャン！

引っ張ると同時に、豆腐と水が落ちてくる。

「まず...水をどうにかしろよ」

「忘れてました」

「豆腐さん、お疲れさまです」

「お疲れ～」

「豆腐さんって、凄い働きますね」

「そうか？でもうちは商売していたからな」

朝四時から仕事が始まる。

「それを大豆の頃から見ていたから、仕事するのが普通なんだわ」

「なるほど～」

「何故だ！何故お客がないのだ！」

主任（豆腐）が企画したバイキングは、スタッフの方が数が多い。

「やっぱり冷や奴だけのバイキングじゃ、お客さん来ないですよ」

バイト（人）が言うと。

「何をー！！」

主任はバイトに突撃した。

「誕生日は豆腐を食べようキャンペーンは、残念ながら、失敗でした」
ズンと暗くなる会議室。

「しかし、いいニュースもあります、誕生日おめでとうと、豆腐に字を書くための、デコ醤油ジュレ（12色1500円）ですが、これの増産が決定しました」

うちの会社は豆腐屋なのですが、デコ醤油ジュレが売れたおかげで、夏のボーナスが例年よりアップしました。ありがとう、デコ醤油ジュレ！夏休みはニセコに旅行してきます。

オフィス設置のコーヒーバー。

「うちの会社だけだろうな」

「そうだな」

アイスコーヒーに合うブロック豆腐が、氷の代わりに置いてあるの。

「しかも、微妙に美味しい」

「そうなんだよ、微妙に美味しい！」